

期 日 二〇一九年十月十二日（土）・十三日（日）
会 場 関西大学千里山キャンパス

日本中国学会 第七十一回大会要項

日本中国学会

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第七十一回大会を、来る十月十二日（土）及び十三日（日）の両日にわたり、関西大学千里山キャンパスにて開催いたします。万障お繰り合わせのうえ、ご参加くださいますようご案内申し上げます。特別講演会及び関西大学所蔵貴重漢籍展示の企画も準備いたしております。

ご参加の方は、同封の振込用紙を使用し、必要な項目に○印をつけ、合計振込金額をご記入のうえ、二〇一九年九月二十日（金）までにお振込みください。消印は九月二十日までを有効とし、振替受領証をもって領収書に代えさせていただきます。振替受領証は、諸会費支払い済の証明書として受付にてご提示いただく場合がございますので、大会参加の際にはお忘れなくご持参いただきますようお願いいたします。

敬具

二〇一九年八月二十日

日本中国学会理事長 金 文京

第七十一回大会準備会代表 吾 妻 重 二

会員各位

日本中国学会第七十一回大会

2019年10月11日（金）～13日（日）

日	時	行 事	会 場
11日 (金)	13:00	理事会	第1学舎1号館3階 A301教室
	15:00	評議員会	
12日 (土)	9:30	受付開始	第1学舎5号館 3階
	10:00	開会式	第1学舎5号館 4階 E401教室
	10:30～ 12:00	研究発表 Ⅰ. 文学語学部会	(各会場) 第一会場 E401教室
		Ⅱ. 日本漢文部会 文学・語学部会	第二会場 E402教室
		Ⅲ. 哲学・思想部会	第三会場 E403教室
	12:20	記念撮影	第1学舎5号館 4階 テラス
	12:30	各種委員会	第1学舎4号館 2階 各教室
	13:30～ 14:30	研究発表 Ⅰ. 文学・語学部会	(各会場) 第一会場 E401教室
		Ⅱ. 文学・語学部会	第二会場 E402教室
		Ⅲ. 哲学・思想部会	第三会場 E403教室
	15:00～ 17:00	特別講演会	第1学舎5号館 4階 E401教室
17:20	総会	第1学舎5号館 4階 E401教室	
18:00	懇親会	第1学舎1号館 1階 不二家食堂	
13日 (日)	9:00	受付開始	第1学舎5号館 3階
	9:30～ 12:10	研究発表 Ⅰ. 文学・語学部会	(各会場) 第一会場 E401教室
		Ⅱ. 文学・語学部会	第二会場 E402教室
		Ⅲ. 哲学・思想部会	第三会場 E403教室
	12:10～ 13:10	理事会	第1学舎5号館 2階 E204教室
	13:10～ 15:10	パネルディスカッション (次世代シンポジウム)	第一会場 E401教室
15:20	閉会式	第一会場 E401教室	

◆大会期間中、総合図書館1階展示室で特別展「関西大学図書館所蔵の貴重漢籍」を開催しております。ぜひご覧ください（46頁参照）。

◆各種委員会教室（第1学舎4号館 2階）

大会委員会：D208 出版委員会：D209 論文審査委員会：D210
研究推進・国際交流委員会：D211 広報委員会：D212
選挙管理委員会：D213 将来計画特別委員会：D214

◆大会本部（学会事務局／大会準備会控室）

第1学舎5号館 3階 E301教室

◆休憩室 第1学舎5号館 2階 E207・E208教室

◆当日受付／クローク 第1学舎5号館 3階／E304教室

※12日（土曜日）の荷物預かりは、午後6時で終了いたします。特別講演会・総会の後にお引き取りいただき、懇親会場にお進みください。懇親会場には荷物置き場を設けます。

◆書店・出版社展示 第1学舎5号館 3階 E305・E306教室



第1学舎1号館



第1学舎5号館
(右手奥が4号館)

の会場・時間帯一覧表

		第二会場 第1学舎5号館 E402	第三会場 第1学舎5号館 E403
12日 (土)		日本漢文/文学・語学部会	哲学・思想部会
	10:30~11:00	II-1 余 祺琪 (23)	III-1 張 瀛子 (33)
	11:00~11:30	II-2 横山 俊一郎 (24)	III-2 藤田 衛 (34)
	11:30~12:00	II-3 孫 琳淨 (25)	III-3 王孫 涵之 (35)
	12:20	【記念撮影】5号館4階テラス(雨天の場合は1号館2階)	
	12:30	【各種委員会】4号館2階各教室	
	13:30~14:00	II-4 叢 小榕 (26)	III-4 張 淑君 (36)
	14:00~14:30	II-5 平田 昌司 (27)	
	18:00~	【懇親会】第1学舎1号館1階 不二家食堂	
13日 (日)		文学・語学部会	哲学・思想部会
	9:30~10:00	II-6 小川 主税 (28)	III-5 臧 魯寧 (37)
	10:00~10:30	II-7 鈴木 基子 (29)	III-6 二ノ宮 聡 (38)
	10:40~11:10	II-8 福家 道信 (30)	III-7 董 伊莎 (39)
	11:10~11:40	II-9 王 柳 (31)	III-8 孫 瑾 (40)
	11:40~12:10	II-10 楊 冠穹 (32)	
	12:10~13:10	【理事会】5号館2階 E204教室	

◆ご案内

- ・キャンパス内は指定喫煙所のみ喫煙可能です。ご協力をお願いします。
- ・12日(土)は学内の各生協食堂及びレストランが営業しています。またキャンパス周辺にも飲食店がございます。
- ・12日の各種委員会、13日の理事会の出席者には昼食弁当が出ますので、お申し込み頂くには及びません。
- ・臨時託児室のご案内は50~51頁をご覧ください。
- ・構内の駐車場は利用できません。公共交通機関をご利用ください。
- ・12日(土)昼の記念撮影は5号館4階のテラスで行います。ふるってご参加ください。

研究発表・各種委員会等

		第一会場 第1学舎5号館 E401
12日 (土)	10:00~10:20	【開会式】
		文学・語学部会
	10:30~11:00	I-1 栗山 雅央 (13)
	11:00~11:30	I-2 王 昊聰 (14)
	11:30~12:00	I-3 武 茜 (15)
	12:20	【記念撮影】5号館4階テラス(雨天の場合は1号館2階)
	12:30	【各種委員会】4号館2階各教室
	13:30~14:00	I-4 乾 源俊 (16)
	14:00~14:30	I-5 荒川 悠 (17)
	15:00~17:00	【特別講演会】(41)
	17:20~	【総会】
	18:00~	【懇親会】第1学舎1号館1階 不二家食堂
13日 (日)		文学・語学部会
	9:30~10:00	I-6 陳 駿千 (18)
	10:00~10:30	I-7 表野 和江 (19)
	10:40~11:10	I-8 金 博男 (20)
	11:10~11:40	I-9 黄 詩琦 (21)
	11:40~12:10	I-10 田中 雄大 (22)
	12:10~13:10	【理事会】5号館2階 E204教室
	13:10~15:10	【パネルディスカッション】(次世代シンポジウム)(44) ○橋本 秀美・葉 純芳・新田 元規・松川 雅信 韓 淑婷
	15:20~	【閉会式】

※氏名欄の(数字)は発表要旨掲載頁

◆諸会費

- ・大会参加費 2,500円 (事前申込の場合2,000円)
- ・懇親会費 5,000円 (院生3,000円)
- ・昼食弁当代 1,000円/一食
- ・記念写真代 1,000円

日本中国学会第七十一回大会プログラム

I 第一会場 (E四〇一教室)

十月十二日(土) 午前 文学・語学部会

I-1 班氏父子の賦作に見る「賦」の継承関係について(十時三十分～十一時)

栗山 雅央(西南学院大学)

司会 原田 直枝(南山大学)

I-2 陸機「弔魏武帝文」執筆とその後の変化について(十一時～十一時三十分)

王 昊聰(九州大学大学院)

司会 柳川 順子(県立広島大学)

I-3 六朝志怪に見える韻文の機能(十一時三十分～十二時)

武 茜(東京大学大学院)

司会 富永 一登(安田女子大学)

十月十二日(土) 午後 文学・語学部会

乾 源俊(大谷大学)

司会 谷口 真由実(長野県立大学)

I-5 劉禹錫の詩作意識―「董氏武陵集紀」を補助線として―(十四時～十四時三十分)

荒川 悠(筑波大学大学院)

司会 土谷 彰男(早稲田大学)

特別講演会(十五時～十七時) [共催 KU-ORCAS(関西大学アジア・オーブン・リサーチセンター)]

中国研究とデジタルヒューマニティ

趣旨説明 東アジア文献資料のデジタルアーカイブスの現状とKU-ORCASの目指すもの

内田 慶市(関西大学)

講演

一、「全球漢籍合璧工程」

二、「東アジア仏教研究におけるコンピュータ利用の実際」

三、「AIを用いた漢文の文法解析」

鄭 傑文(山東大学国際漢学研究センター)

師 茂樹(花園大学)

安岡 孝一(京都大学人文科学研究所)

十月十三日(日) 午前 文学・語学部会

I-6 朝鮮銅活字本『三国志演義』の底本について(九時三十分～十時)

陳 駿千(関西大学大学院)

司会 井口 千雪(九州大学)

I-7 『型世言』評者・陸雲龍と復社の関係について(十時～十時三十分)

表野 和江(鶴見大学)

司会 野村 鮎子(奈良女子大学)

I-8 「猫時計」説に見る中国人の時間意識（十時四十分～十一時十分）

金 博男（北海道大学大学院）

司会 大平 桂一（大阪府立大学）

I-9 東西文明の「偶像」たち——雑誌『学衡』の口絵の世界（十一時十分～十一時四十分）

黄 詩琦（京都大学大学院）

司会 加部 勇一郎（立命館大学）

I-10 廃名詩論における作者という個人主体（十一時四十分～十二時十分）

田中 雄大（東京大学大学院）

司会 松浦 恆雄（大阪市立大学）

十月十三日（日）午後

パネルディスカッション（次世代シンポジウム）（十三時十分～十五時十分）

近世『家礼』研究——文献と儀礼実践の間のコミュニケーション

○橋本 秀美（青山学院大学）

葉 純芳（北京大学）

新田 元規（徳島大学）

松川 雅信（日本学術振興会特別研究員）

韓 淑婷（九州大学大学院）

Ⅱ 第二会場 (E四〇二教室)

十月十二日(土) 午前 日本漢文／文学・語学部会

Ⅱ-1 佐藤直方の朱子理解について——その道体論を中心に(十時三十分～十一時)

余 祺琪(東洋大学大学院)

司会 垣内 景子(明治大学)

Ⅱ-2 泊園書院関係碑文にみる藤澤南岳の実業観(十一時～十一時三十分)

横山 俊一郎(関西大学非常勤講師)
司会 矢羽野 隆男(四天王寺大学)

Ⅱ-3 『八犬伝』犬士列伝の構想に関する一考察——『水滸伝』の受容を通して——(十一時三十分～十二時)

孫 琳浄(京都府立大学大学院)

司会 長尾 直茂(上智大学)

十月十二日(土) 午後 文学・語学部会

Ⅱ-4 文化大革命期の芸術作品におけるイデオロギーと普遍的芸術性及び解釈の多面性

——音楽を中心に——(十三時三十分～十四時) 叢 小裕(明星大学)

司会 牧 陽一(埼玉大学)

Ⅱ-5 晩清・民国初期における電話と言語(十四時～十四時三十分)

平田 昌司(京都大学)
司会 内田 慶市(関西大学)

十月十三日(日) 午前 文学・語学部会

Ⅱ-6 反響する「中国青年」という声―張愛玲「茉莉香片」における男性世界への拘泥(九時三十分〜十時)

小川 主税(大阪大学大学院)

司会 濱田 麻矢(神戸大学)

Ⅱ-7 張愛玲の自伝的小説『小団円』について―米国人の夫汝狄とそのモデル、ライヤの比較を中心に(十時〜十時三十分)

鈴木 基子(日本大学)

司会 濱田 麻矢(神戸大学)

Ⅱ-8 沈從文の物質文化史研究―銅鏡への興味(十時四十分〜十一時十分)

福家 道信(近畿大学)

Ⅱ-9 八〇年代の中国における民族・文化的アイデンティティの諸相―「ルーツ文学」の場合(十一時十分〜十一時四十分)

王 柳(東京大学大学院)

司会 加藤 三由紀(和光大学)

Ⅱ-10 韓寒と「知識人文学」―「八〇後」から見る中国同時代の文学像(十一時四十分〜十二時十分)

楊 冠穹(関西外国語大学)

司会 千野 拓政(早稲田大学)

Ⅲ 第三会場 (E四〇三教室)

十月十二日(土) 午前 哲学・思想部会

Ⅲ-1 鄭玄の『周礼』注釈における漢の制度をめぐる言説

——中国の儒教経学における「古」と「今」について(十時三十分～十一時)

張 瀛子(東京大学大学院)

司会 渡邊 義浩(早稲田大学)

Ⅲ-2 李鼎祚『周易集解』の流伝について(十一時～十一時三十分)

藤田 衛(広島大学)

司会 辛 賢(大阪大学)

Ⅲ-3 北宋初期における「注疏の学」——邢昺『論語正義』の編纂をめぐる(十一時三十分～十二時)

王孫 涵之(京都大学大学院)

司会 弮 和順(北海道大学)

十月十二日(土) 午後 哲学・思想部会

Ⅲ-4 学者としての梁啓超——日中の新資料から見た晩年の梁啓超像(十三時三十分～十四時)

張 淑君(広島大学大学院)

司会 陳 捷(東京大学)

十月十三日(日) 午前 哲学・思想部会

Ⅲ-5 葛洪の人間観について—尚賢思想を中心に—(九時三十分～十時)

臧 魯寧(京都大学大学院)

司会 二階堂 善弘(関西大学)

Ⅲ-6 碧霞元君関連宝巻から見る明末清初の北京の民間信仰(十時～十時三十分)

二ノ宮 聡(関西大学非常勤講師)

司会 森 由利亜(早稲田大学)

Ⅲ-7 鬼と疫病の関係再考(十時四十分～十一時十分)

董 伊莎(関西大学大学院)

司会 酒井 規史(慶應義塾大学)

Ⅲ-8 病と巫—「與鬼交」を中心に(十一時十分～十一時四十分)

孫 瑾(広島大学大学院)

司会 大形 徹(大阪府立大学)

発表要旨

第一会場

I-1 班氏父子の賦作に見る「賦」の継承関係について

栗山 雅史（西南学院大学）

班彪（字叔皮、三〇五四）・班固（字孟堅、三二〇九二）・班昭（字惠班、曹大家、四九〇二二〇）父子は、その賦作品が『文選』に採録されることから明らかなように、漢代を代表する文人一族である。この『文選』所収の班氏父子の賦作の中でも、班彪「北征賦」（巻九）・班固「幽通賦」（巻十四）・曹大家「東征賦」（巻九）については、伊藤正文・原田直枝・釜谷武志氏らによって、これら諸賦作品に対する本文の字句の運用や作品の構成に基づいた分析が展開されている。但し、これらはいくまで各作品間の関係性に対する考察が中心であり、班氏父子の賦作全体へと拡大した研究はこれまでに殆ど見受けられなかった。

本発表は、上掲の班氏父子の賦作品を主な対象として、彼らに共通する特徴を確認することで、実作面での影響関係を明確にすることを目的とする。具体的には、釜谷氏も指摘する「幽通賦」と「東征賦」について、「幽通賦」に施された曹大家注を媒介としてその関係性を全面的に確認する。また、諸作品に共通して作品の結末部分に配置される「乱辞」の比較を通じて、各作品の継承関係を確認する。以上の作業から、班氏父子の賦作を包括的に分析することが可能になると考えている。

以上の考察結果と併せて、上掲の先行研究でも頻繁に言及される劉歆（約前五〇〇二二）「遂初賦」（『古文苑』巻五）との関連についても、ただ作品間の関係性を確認するだけでなく、彼らの文学創作に対する意識の影響関係をも含めて、劉歆が班氏父子の賦作に果たした役割を確認したい。

漢代の賦作の全体像を探ろうとする場合、従来は揚雄の「詩人之賦・辞人之賦」や班固の「賦者、古詩之流」などの概念的評語に基づく傾向が強かった。しかし本発表を通じて、前漢から後漢にかけて賦がどのように形作られていったかを実作面から論証することで、賦文学史研究の更なる充実が図れるものと考えている。

I-2 陸機「弔魏武帝文」執筆とその後の変化について

王 昊聰（九州大学大学院）

陸機の「弔魏武帝文」は、『文選』巻六十に収録され、更に『文心雕龍』哀弔篇にも言及がある彼の代表作の一つである。近代日本においても、狩野直喜が「予が尤も愛読するものは、『弔魏武帝文』なり」と述べるなど評価は高い。この弔文に関する先行研究は多いが、陸機の曹操に対する態度については、いまだ定説がない。例えば黄侃は、この弔文は「誚辱武帝」と説きながら、その本意は複雑で、「意之多雜精義堅深甚矣」と認めている。この弔文は、魏武帝の功績を称賛するという公的な側面を持つと同時に、人間曹操が臨終に際して周囲の者に吐露した極めて私的な感情をも描き出している。

本発表で注目する問題は二点ある。まず一つ目は、陸機が魏武帝曹操に対して如何なる感情を懐いていたか。陸機は、果たして何を目的としてこの弔文を執筆しようとしたのかという問題である。そして、次に二つ目の問題として考えたいのが、さきに述べたような臨終に際しての曹操の私的な言動を採り上げたのはなぜかということである。

この弔文の序に拠れば、元康八年（二九八）著作郎として晋朝に仕えた陸機は、宮中の秘閣に蔵されていた曹操の遺令四条を目撃し、大いに歎息し、傷懷すること久しきに及んだという。この時の驚きが、陸機の直接の執筆動機であることは間違いないであろうが、そもそも亡国呉の遺臣として晋朝に召しかかえられた彼が、かかる「英雄の死」の真実の姿に接し、これをどのように捉え、そして、その後（約五年間）の彼の創作活動に如何なる影を落としたのかについては、少なからず興味をそそられる問題と言えるのではなからうか。陸機晩年の死生観とともに、その創作態度の変化を可能な限り跡付けてゆきたい。そして、更に「その後」、つまり陸機没後東晋に遷って以後の曹操像および文学作品に表明される死生観において、この弔文が如何なる影響を与えたかを考えてみたい。

1-3 六朝志怪に見える韻文の機能

武 茜（東京大学大学院）

西晋王朝が滅びた後、三一七年に東晋が建康において建国し、この時代から『搜神記』をはじめとする志怪書が盛んに編纂されるようになった。「経籍志」では、これらの書が史部に分類されているとはいえ、これらの多くは正史ではなく、人間社会や自然界に起きた怪異事件や不思議な自然現象を記録する。

近年の志怪書に関する研究によれば、志怪書が様々な怪奇事物を記すのは単なる娯楽のためではない。話の取捨選択や言葉遣いなどを考察した結果、志怪書は編纂者の考え方、さらに政治的意図を反映し得る、「史的」な性格を持つ書物であることが明らかになった。つまり、内容の面から考えれば、志怪には「実用的」な側面があることが分かる。しかし六朝の志怪には意図の伝達に関わりないように見える韻文が散見する。

志怪書に出る韻文は常に散文と組み合わせられて記録される。そのうち、讖諺についての出来事のように、韻文（讖諺）に主眼が置かれる話もあれば、むしろ散文が物語を展開する役割を担い、韻文が副次的な部分を構成する話もある。例えば『幽明録』に見える「水底弦歌」の話において、梁上翁の歌は韻文の形で収録されており、これと類似する話は『北堂書鈔』引『志怪』にも見えるが、後者では宴の場面と歌の内容が省略されている。これは類書に引用される際に生じた異同かもしれないが、宴と韻文の部分がなくとも話の展開に支障をきたすことはない。その一方で、「郭長生」の話に見えるような文字遊戯は、なくても物語が成立するけれども、それを取り入れることで人物の身分に関する情報が補完される機能を持つ韻文である。

こうした物語の叙述に大きな影響を及ぼさない韻文を記録することで如何なる差異が生じるのか、ひいては韻文と散文がそれぞれどのような役割を果たすのか、という問題意識から、今回の発表では志怪に見える韻文を中心として、物語の構造の面から六朝志怪の特徴を検討したい。

李白先祖流謫の地を李陽冰「草堂集序」は「条支」、范伝正「唐左拾遺翰林学士李公新墓碑序」は「碎葉」とする。「碎葉」は玄奘三蔵の『大唐西域記』に「素葉水城」として見える。「条支」は『史記』大宛伝に、張騫が使いした大月氏の西数千里にある安息国、そのさらに西数千里にある国として名が見える。「安息在大月氏西可数千里。…条枝在安息西数千里、臨西海」。張騫が実見したのは大宛や大月氏、ほか大夏と康居まで。その先は伝聞にかかり、安息国はともかく、条支国については相応に不確かな情報となる。にもかかわらず李陽冰がこの地名を用いるのは、『史記』が続けて「安息長老伝聞、条枝有弱水・西王母、而未嘗見」と記すのによるだろう。索隠引く『括地図』に「崑崙弱水非乘龍不至。有三足神鳥、為王母取食」等によれば、条支は崑崙・弱水のある神仙にゆかりの地と目せられる。李白一家をそうした伝説に彩られた土地からの帰還者であるとするのは、出生を老子になぞらえるのとおなじ意図に基づく、と言えそうだ。しかし李陽冰の用意はもう少し深いところにあると思われる。というのも、張騫による上述の情報は漢の武帝を第一の受け手として報告されたものである。武帝の崑崙山とのかかわりについて考えないわけにはいかない。福永光司「道教における天神の降臨授誠」（『道教思想史研究』）によれば、「…崑崙山に神靈が集まり、上帝太一の天神がこの山に居所を置き、得道の仙人真仙がまたそこに集止するという思想信仰は、…その源流もしくは原型を漢の武帝の上帝太一神の祭祀とそれに密接な関連をもつ崑崙山の神仙信仰に跡づけるのが、最も適切であろう」と。

従来説が、謫居の地「条支」を偽としながら帰還の年号「神龍」始め（七〇五）を真とし、李白実際の生年「大足」元年（七〇一）から出生地を西域とするのは、無理な推論である。「条支」からの帰還と出生・李氏復姓、「神龍」をめぐる記述をどう読むか。所見を述べたい。

I-5 劉禹錫の詩作意識―「董氏武陵集紀」を補助線として―

荒川 悠（筑波大学大学院）

本発表は中唐詩人劉禹錫の生涯に通底する詩作に対する意識について考察したものである。劉禹錫詩研究において取り上げられる劉詩は、主に①「寓言詩」を中心とした諷諭詩、②風土や風俗を描くことに特化した詩、③白居易との唱和詩、④詠懷詩についてである。従来の研究ではこれらは別々に考察がなされてきた。

本発表の眼目は劉禹錫の詩を全体的に捉え、彼の詩作意識に一貫性があることを論証する点にある。それを闡明するために劉禹錫が元和七年（八一二）頃に著した「董氏武陵集紀」を読み解いてゆく。そしてそこに示された詩作意識が自身の詩にどのような影響を与えているかを制作年代の異なる何篇かの詩を取り上げて具体的に分析する。

「董氏武陵集紀」の中で劉禹錫は建安年間から永明年間の詩を肯定的に捉え、六朝詩人のように互いに競って詩作し合う営為が、唐王朝においては「国朝」の「粲然復興」を齎したという。同時に安史の乱以降文官が尊ばれなくなったことを述べて、政治における詩の重要性を説く。

詩と政治について、①・②は儒教経典および『漢書』芸文志に則った詩作でありその政治性は明瞭だ。③・④について、③の通り劉禹錫と白居易は唱和をし合ったが、両者は過去にない表現を追求し合ったという。④を代表する「金陵五題」詩の序にその詩の表現が白居易を感嘆させた」と記されるように、白居易は劉禹錫詩の表現に着目していた。そうした劉詩の表現について白居易は「文章微婉我知丘」と述べた。これは劉禹錫が白居易との本格的な唱和を始めたばかりの頃に、劉が「酬樂天揚州初逢席上見贈」詩で自身の政治的不遇を白居易に絡めて仄めかす内容から言わしめたものである。「微婉」が持つ意味合いは①・②同様に政治性を端的に示すものである。白居易は劉禹錫詩から①～④を貫く詩作意識を見出していた。こうした点から劉禹錫が①～④を詠じた詩作意識には一貫性があることを確認できる。

I-6 朝鮮銅活字本『三国志演義』の底本について

陳 駿千（関西大学大学院）

朝鮮銅活字本『三国志演義』の残本（以下、「銅活字本」）は、近年、韓国で発見され、『三国志演義』版本研究の新たな地平を開いた。この銅活字本が発見されて以来、関連研究は順次発表されているものの、その成立時期、刊行経緯、版本学上の位置づけなどの諸問題に関しては、まだ定説が少ない。この銅活字本の底本については、「周曰校甲本を底本に、嘉靖壬午本を参照してさらなる校勘を施した版本である」と主張する朴在淵説（『關於新發現的朝鮮活字本『三国志通俗演義』』、『南京大學學報（哲學・人文科學・社會科學）』二〇一〇年第三期）と、「嘉靖壬午本や周曰校甲本と同時か、あるいはそれより早い版本であろう」と主張する劉世徳・夏薇説（『三国志演義』朝鮮銅活字本試論、『文學遺產』二〇一一年第一期）が挙げられる。

しかし、「二十四卷系」という版本グループにおける銅活字本の位置づけを考えるには、上記の研究で挙げられている嘉靖本・周曰校甲本以外の諸本をも視野に入れる必要がある。発表者は、比較対象の範囲を嘉靖本・周曰校本（朝鮮覆刻甲本、及び蓬左文庫蔵丙本）・夏振字本・夷白堂本・李卓吾本といった諸本に拡大し、更に「二十卷系」に属する葉逢春本・劉龍田本をも参考し、二十四卷系における銅活字本の位置づけを推定する上で、その底本のあり方を追究したい。

また、新たな方法論として、「誤植混入の経緯からみる版本関係」という研究方法を試みたい。すなわち、銅活字本の誤字・脱字・衍文などを見出し、他の諸本と対照した上、誤植が混入された経緯を推測し、比較対象の諸本において同じ誤植が存在するか否かを確認する。それによって、各版本の系統づけや成立の先後を推定する。これを以て、銅活字本の底本の実態に迫ることを試みたい。

銅活字本は、計六七葉しか現存していないが、そのテキストには、二十四卷系の他の版本と一線を画し得る特徴がいくつか認められる。この事実は、銅活字本が二十四卷系に属しながら、自ら一つの独立した分枝となっている、という可能性を強く示唆している。とすれば、『三国志演義』二十四卷の系譜図は今までの推測より更に複雑なものとなり、より細かな検証が必要となるであろう。

1-7 『型世言』評者・陸雲龍と復社の関係について

表野 和江（鶴見大学）

『型世言』は明末の崇禎年間に、杭州の書肆、陸雲龍と陸人龍兄弟の手になった白話短編小説集である。八十年代、韓国ソウル大学の奎章閣で発見されて以来、明末清初の小説に大きな影響を与えた作品として『三言二拍一型』とも称されてきた。だがその刊行状況はいまだ多くの点が不明であり、兄弟の生平についても詳しいことはほとんどわかっていない。

兄弟のうち兄の陸雲龍は、『型世言』の序者・評者として知られるほか、明末から清初にかけて多数の書籍を刊行した出版家として当時一定の名声をもち、また小説『魏忠賢小説斥奸書』『清夜鐘』の作者とも目されることから、主たる研究対象とされてきた。その中で、論者の多くが指摘するのが、彼の著述・出版書に通底する「愛国忠義」への表彰と、そこに復社、および幾社が与えた影響である。

実際、彼の詩文集『翠娛閣近言』には「用陳臥子韻」「俱用幾社韻」とあり、また息子が撰した「伝」には、復社の盟主張溥が彼に寄せた書簡に関する記述がある。しかしながら従来の研究は、その影響関係は認めるものの、実際の交往についてはこれを証明する資料がないことを理由に、否定的な見方が大勢を占めてきた。

本発表は、陸雲龍の書籍に序者・評者として参加した寧波慈溪の出版家馮元仲の刊行書を手がかりとして、陸雲龍が復社、幾社の人びとを同人とする文社に関わっていた事実を明らかにする。さらに、この文社との関わりが陸雲龍の出版活動に与えた具体的な影響を論じるとともに、彼がのちに復社との関係を隠滅せんとした可能性にも言及したい。

なお本発表の内容は、実は今もなお陸雲龍作か決定的な証拠を欠く『清夜鐘』に関して、これを裏付けるものともなり得ると考える。

I-8 「猫時計」説に見る中国人の時間意識

金 博男（北海道大学大学院）

明清代の中国において、猫の瞳の形態変化によつて時刻を定めるといった「猫眼定時」の説が流行した。たとえば、「明」李時珍『本草綱目』巻五十一の「猫」の項に「あるものは言う。その瞳は時刻を定められると。子午卯酉は一本の線のように、寅申巳亥は満月のよう、辰戌丑未は棗の種のようなである」とある。猫の目が時計の役目を果たすことから、歴史学者の渡辺義通はその『猫との対話』（文藝春秋、一九六八年）においてこれを「猫時計」と名付けている。本発表でもこの呼び方を踏襲する。「猫時計」説はこれまで日本の民俗誌や文学誌において言及されてはきたものの、中国の文献に見える記述については、掘り下げられてはこなかった。

「猫時計」説について、発表者のこれまでの考察によれば、説自体は『易経蒙引』や『易経存疑』などの明代の書物に見られ、清代に至ると民間に広く伝わったが、時刻を計る手段としては一般的には用いられておらず、科学知識の伝来のもと、民国においては非難の的となり、徐々に姿を消していったことが明瞭となっている。だが、「猫時計」説をめぐっては、残された謎がいまなお少なくない。そのひとつが、瞳の形態変化に対応する時刻を表す十二支の配列およびその背景にある時間意識である。本発表は、「猫時計」説の成立までの経緯を概観し、日本における受容との比較のもと、術数「奇門遁甲」における「一气三元」といった時間観念との関係性に注目しつつ、「猫時計」説に反映されている中国人の時間意識を考察したい。

I-9 東西文明の「偶像」たち——雑誌『学衡』の口絵の世界

黄 詩琦（京都大学大学院）

雑誌『学衡』が創刊された一九二二年、中国の出版界は活気にあふれていた。一九一〇年代後半からの「新文化運動」の影響を受け、大量の雑誌や新聞が登場していた中でも、『学衡』はその中の「非主流」を貫こうとしたと言えるだろう。「学術を論究し、真理を追求し、国粹を解明し、新知を融合する」（論究学術、闡求真理、昌明国粹、融化新知）という立場に立つ『学衡』が強調したのは、東洋文明であれ、西洋文明であれ、長い歴史を経て、現代まで遺るレガシーこそその文明の「粹」であり、捨てられない存在だということである。この方針は、雑誌の口絵（挿畫）・論説（通論）・研究（述學）から、旧体詩創作の投稿欄まで一つ一つに表れている。本発表はそのうち口絵に焦点を当てたものである。

『学衡』の出版は一九二二年から一九三二年まで、変化の激しい出版界において、比較的支障なく続いた。総計七九冊の巻頭には、各冊ごとに口絵である「挿畫」という欄が設けられている。口絵に用いられた画像の種類は、西洋や中国の哲人・文人の肖像、あるいは中・西の対比、当時新しく発見されていた歴史・考古資料の提示まで多様である。とりわけ、東西の文明に対して重要な役割を果たした人物の肖像が多い。

本発表は『学衡』巻頭の「挿畫」を中心として、まず『学衡』に載った口絵・挿畫の全体像を述べ、そこに見られる特徴を雑誌同人たちの主張と学術的理念と関連づけ、『学衡』の口絵・挿畫の世界を解明しようとする。清末以来の雑誌や新聞の登場と同じく、口絵の導入も西洋書籍文化の中国における受容の一環であり、読者文化や知識の流布と深く関連している。雑誌『学衡』の同人たちは、口絵に掲げた東西文明の「偶像」の姿を通じて、読者に理想の文化を広めようとしていた。さらに本発表は、清末民初以来の「挿畫文化」という視点からも『学衡』に対する分析を進めようとする。

I-10 廢名詩論における作者という個人主体

田中 雄大（東京大学大学院）

廢名（一九〇一—一九六七）は詩と小説の両方の創作を行った文学者であり、その難解な作風は同時代の詩人たちに大きな影響を与えた。また廢名は自ら詩を創作しながら同時に詩論も発表しており、彼が一九三〇年代に北京大学で行った講義をまとめた『談新詩』はその集大成であり、「新詩の内容は詩の内容でなければならない」という主張によって広く知られている。この主張に関して、従来の研究はそれが胡適の主導した分かりやすい白話詩に対抗する形で提出されたことを強調し、その姿勢から象徴主義詩歌や現代派との関連性を汲み取ってきた。

だがこのように主流の文学者への対抗言説として廢名の詩論を評価するにあたっては、「詩の内容」のもう一つの文脈、即ち作者の存在を考慮しなければならない。廢名は、新詩が備えるべき「詩の内容」とは作者が実際の事物に触発されて初めて顕在化する感情であるとし、実際にこの観点に基づいて胡適「胡蝶」や郭沫若「夕暮」などを高く評価している。作者の感情の反映として作品を理解する姿勢は、実は廢名の従来の創作観である「私」という個人主体の重視を引き継いだものであると見なすことができるのだが、周知の通り個人という概念に対するこのような簡明な理解とはまさしく五四時期における主流な言説に他ならなかった筈である。つまり廢名の詩論の中では、分かりやすくない詩への肯定という新しさ極めて単純な作者観という古さが同時に存在しているのだが、従来の研究はこの一見すると奇妙に見える同居に対して注意を払ってこなかった。

従って本発表ではまず廢名の創作観における作者の位置づけを明らかにした上で、個人主体としての作者という観点から『談新詩』を分析することにより、現代派の理論的支柱として先進性を付与されてきた廢名の詩論の読みなおしを図る。また作者という観点到限定して同時代の詩論との比較を行うことで、廢名の詩論が持つ独自性に関しても再考を促す。

第二会場

II-1 佐藤直方の朱子理解について——その道体論を中心に

余 祺琪（東洋大学大学院）

佐藤直方（一六五〇～一七一九、慶安三年～享保四年）は、山崎闇斎の高弟で、崎門學派「三傑」の一人として日本儒学史に名を留める。直方の遺書については、彼の再伝の弟子稲葉黙齋の編した大全集『輻藏録』がある。ただし、そのうち最も門人弟子に尊ばれたのは、『朱子語類』『近思錄』などを摘録した所謂「藤門の四部書」（『講学編策録』（一六八三）、『排釈録』（一六八五）、『鬼神集説』（一六八九）、『道学標的』（一七一二））と呼ばれる書物である。管見の及ぶかぎりでは、直方には自己の思想に関する言及が作品という形で残るものは少なく、ほとんどが弟子や門人によって筆録された、漢字仮名交じり文の講義や筆記の類である。

彼に対する従来の評価は、生前から、朱子思想を忠実に信奉し、継承した人物とされ、その学問や思想に特に創見はなく、朱子思想の祖述者として位置づける傾向が強かった。さらに近年では、直方の理の思想や太極論に着目した論述もいくつかみられるが、基本的には、上述した立場に基づいている。直方による朱子思想理解について、これまで直方自身の思考に即して検討されることは少なかったと言えよう。

直方は朱子が呂東萊と共同編纂した『近思錄』に大きな影響を受けている。彼の『講学編策録』はその産物である。そして、『鬼神集説』以降、彼は何度も道体論の講義を行っている。そこでは、直方は「易有太極」と「無極而太極」説の解釈を中心に論述している。本発表では、これらを朱子の「無極而太極」論と比べることで、道体論に関する直方の解釈姿勢やその思想について検討し、彼の朱子思想理解について考察する。今回は、主に直方晩年の『太極講義』（一七〇三）、『講近思錄為諸生記』（一七二七）、『道体講義』（一七二八）、『近思錄筆記』（同年）、『存養筆記』（同年）などを取り上げて、彼の道体論における、朱子思想理解の特色について明らかにしていきたい。

II-2 泊園書院関係碑文にみる藤澤南岳の実業観

横山 俊一郎（関西大学非常勤講師）

四国高松出身の藤澤東暉によって開かれた泊園書院は、文政八年（一八二五）の開設以来、明治初年の混乱期を除いて、昭和前期に至るまで長きにわたって商都大阪に存在し続けた。またこの漢学塾の門人は多く、二代院主藤澤南岳（一八四二—一九二〇）が主宰する明治期には通算して約五千人が学びに来たといわれている。一般的に、漢学塾は近代教育が浸透するにつれて廃れていく、とイメージされるのであるが、泊園書院に関してはその常識が当てはまらないのである。

では、なぜ近代の泊園書院は多くの人々から支持されていたのだろうか。今のところ発表者は、当時の泊園門人のうち豪農・豪商層に注目している。というのも、幕末期における泊園門人の多数派（儒者・医者・僧侶）には彼らは入っていないからである。これまでの考察により、彼らは銀行・紡績・鉄道など近代企業の経営に参画したり、みずから先進的なビジネスを創出したりするなど、実業に熱心であったことが判明している。

本発表では、この新たに登場した泊園門人の多数派の概要を示したうえで、当時の院主南岳が実業そのものをどのように見ていたのかについて検討する。そのさい、『泊園書院関係碑文調査報告書』に掲載された南岳撰による実業家の顕彰碑および墓碑を活用したい。同書には金澤仁兵衛（平野紡績の経営者）や藤本莊太郎（堺綴通の革新者）など著名な実業家の碑文が見られ、それらの記述の中には南岳の実業観が垣間見られるものも存在する。また考察では、碑文に表れた南岳の言説そのものの分析と併せて、『藤澤先生講談叢録』などで示された南岳の思想全体の中でそれらの言説がどう位置づくかについても検討する。

本発表をとおして、実業家に支えられた漢学塾Ⅱ近代の泊園書院という可能性を示すとともに、漢学塾の門人層ないしは支持層に焦点を当てたアプローチが、近代漢学の存在形態を説明する一つの手がかりとなることを提起したい。

II-3 『八犬伝』犬士列伝の構想に関する一考察―『水滸伝』の受容を通して―

孫 琳淨（京都府立大学大学院）

曲亭馬琴の読本作品と中国長篇白話小説『水滸伝』との関わりは、極めて重要な問題として早くから認識されており、中でも『水滸伝』受容の到達点ともいえるべき『南総里見八犬伝』は少なからぬ研究者により論じられてきた。しかし従来の研究は、『八犬伝』の大まかな構成や、部分的な典拠を中心に論じたものが多く、『八犬伝』全体における『水滸伝』の具体的な受容のあり方に関しては、依然として考察の余地が残されている。

発表者はこれまで、犬士・犬田小文吾と犬士・犬坂毛野の個人的活躍を対象に、『水滸伝』の豪傑物語との比較検討を試みてきた。その結果、『八犬伝』は漫然と『水滸伝』の山場や名場面を盛り込んだのではなく、綿密な構想を立てた上で利用していることが明らかとなった。具体的には、『水滸伝』の一節をいくつかの部分に分解して使用した場合にも、決して同じ部分を重複して用いないこと、個々の犬士列伝の途中で犬士のモデルとなる水滸豪傑が変わっても、馬琴は必ず終盤において、それを最初のモデルとなる豪傑（或いは物語の中心となる豪傑）に戻していること、『水滸伝』に散在する水滸豪傑の要素を繋げて利用していることなどが挙げられる。

これらの原則が犬士列伝全体において適用されるのであれば、これを手がかりに、『八犬伝』執筆当初の犬士列伝の構想を復元することも可能であろう。本発表では、小文吾・毛野列伝の考察結果を踏まえつつ、その他の犬士列伝を検討することによって、馬琴がどのような意図で、如何なる工夫をして犬士列伝を組み立てたのか検証を試みる。

II-4 文化大革命期の芸術作品におけるイデオロギーと普遍的芸術性及び解釈の多面性——音楽を中心に——

叢 小榕（明星大学）

毛沢東の「延安の文学・芸術座談会における講話」によって規定された文学・芸術方針のもと、「胡風反革命集団」事件や『紅樓夢』研究批判などによって象徴されるように、共産党政権下において、創作や学術研究の自由が厳しく制限されていた。そんな中、恋愛を題材とした古代説話に材を取り、ソナタ形式など西洋の音楽様式を導入したヴァイオリン協奏曲「梁山伯と祝英台」が認められたのはなぜか。

文化大革命期に入ると、それまでのほぼすべての芸術作品が毒草として批判・禁止され、江青らが制定した「三突出」の創作原則に基づく「革命的モデル劇」がステージを独占した。プロパガンダに徹し、芸術性が皆無またはきわめて乏しい作品が数多く存在していたのは否めないが、中ではイデオロギーを貫きながらも芸術性に基づくプロパガンダ効果が図られ、西洋の芸術様式が取捨選択されながらも導入され、普遍的芸術性が認められる作品が存在するのも事実である。ピアノ協奏曲「黄河」がその一例である。同作では、第一楽章におけるソナタ形式は審査段階で否定されたものの、伝統的協奏曲に基づく楽章の緩急配置のほか、古代中国の名曲を想起させる民族楽器の活用など、芸術性重視の姿勢が窺える。また、革命的現代バレエ「紅色娘子軍」（赤色女子中隊）においては、リヒャルト・ワーグナーが楽劇で多用する手法として知られるモチーフやライトモチーフが導入されたうえ、調性も効果的に活用されている。それゆえ、この二つの作品は今日においてもしばしば演奏・上演され、とりわけ「黄河」はクラシック音楽のレパートリーとして定着する観さえある。

本発表は、主として「黄河」と「紅色娘子軍」にスポットをあて、文化大革命に対する政治的視点に基づくネガティブな評価ゆえ、看過されがちな普遍的芸術性とプロパガンダの相関メカニズムを、解釈の多面性の視点から説明することを主旨とする。

郭嵩燾がイギリス派遣中に電話という機械を実体験したのを皮切りに、晩清の社会にこの新技術は徐々に広まり、やがて非実務的な用途にも充てられるようになった。たとえば孫宝瑄は、新作の古典詩を（筆写を介さず）電話で受け手に正確に伝えることができたことを日記に記して喜んでいる。コード変換を要する電報に比べて、作者と受容者とによって即時に共有される小さな言語空間ができたことになる。

このようなふたりの空間を利用する経験をもつことで大きく変わった中に、留学経験者を含む、経済的に豊かな青年男女も含まれる。若い男女が、家族に隠れて異性と意思疎通したいとき、伝統文学の中では「紅娘」が必要であった。電話の普及は、このような間接的コミュニケーションの状況を一変させ、姿を見せない相手との連絡を可能にする。たとえば胡適「終身大事」における電話の登場は、一九一九年の五四運動前後、急速な拡充が続いていた北京の電話回線の状況を前提にしている。さらに、公衆電話で話す女子の会話内容を盗み聞き、そのまま文字化した（と自称する）雑報がこの時期の新聞には掲載されたりもする。カップルのあいだでひそやかに語られるべき「私」的会話が、公共の世界へとひきずり出される変化が起きてしまったことになる。

さらに、職業教育にも、電話の普及は影響を及ぼした。電話は、一対一の対話だけを通じて意思疎通する手段であるため、その利用にあたって音声言語の規範性が重要になる。単に発信者・受信者の言語能力のみではない。自動電話以前には、発信者がまず電話局の交換手を呼び出し、交換手が受信者を呼び出していたため、電話局にとって、交換手が標準的な中国語を話せる能力、あるいは電話応対の言語的マナーが切実な課題となってくる。

II-6 反響する「中国青年」という声——張愛玲「茉莉香片」における男性世界への拘泥

小川 主税（大阪大学大学院）

本報告は、民国期以降、「中国青年」という概念が男性性をいかにして盤石なものにしてきたのかということ、張愛玲（一九二五—一九九五）の「茉莉香片」（一九四三）を中心に検討するものである。

中国における「青年」像が清末の梁啓超の改革のもとで生まれたことはよく知られている。梁啓超が国家の復興を「若さ」と結びつけて「少年中国説」を発表し、国家的な若返りを図ったことにより、「少年」は清末の文学世界において重要な意味を有するようになった。さらに民国期に刊行された雑誌『新青年』は、旧体制を打破し、国家を復興させるよう青年たちを奮起させた。こうして「中国青年」は新文学の場における主人公として登場し、青年の理想像として受容されたのである。

張愛玲の「茉莉香片」は、戦地上海を逃れて香港へとやって来た男子学生伝慶の物語である。家族からも男性として認識されない伝慶は、理想の男性と仰ぐ言教授からも「中国青年」でないと突きつけられたことで自己喪失に陥っていく。男性世界における自己の存在を追求する伝慶がその時に縋り付いたものは、支配的な愛と暴力であった。性別の差異を不問に付していた時代に、「中国青年」像はその新しさから性別を問わず多くの学生を熱狂の渦に巻き込んでいったが、「茉莉香片」では「中国青年」像の中に旧来の「男性」の理想像が生きながらえていることが浮かび上がってくるのである。

本報告は、「中国青年」像の検討をするにあたり、伝慶の恋愛と暴力にも焦点を当てる。伝慶はどのように五四期以降の自由恋愛を憧憬したのか、そして恋愛を実践できなかつたとき、その恋愛の失敗はどのようにして伝慶を暴力へと向かわせたのかという問題を検討し、「中国青年」という理想像と「茉莉香片」を取り巻く男性世界の関係性を明らかにしたい。

II-7 張愛玲の自伝的小説『小団円』について——米国人の夫汝狄とそのモデル、ライヤの比較を中心に

鈴木 基子（日本大学）

上海時代に書かれた初期作品と言動から、張愛玲には毅然として凜とした才女のイメージが定着してきたが、没後二〇〇九年から二〇一〇年にかけて出版された自伝三部作など、さまざまな新資料が発表され、それらも視野に入れた新たな作家像の構築が必要となつている。

特に、中華圏でベストセラーになつた自伝的小説『小団円』（一九七五—一九七六年執筆、皇冠文化出版有限公司）は、日本ではほとんど論じられていないが、張愛玲の人生と文学を考える上で極めて重要な作品である。

本発表では、張愛玲の二番目の夫となつた米国人ライヤをモデルとした人物、汝狄に焦点を当てる。張愛玲と最初の夫、胡蘭成の関係についてはこれまでも多く論じられているが、ライヤについては司馬新を除いてあまり論じられていない。発表者は『小団円』の主要な三名の女性人物（本人九莉・おば楚娣・母蕊秋）について、モデルとなつた女性の実像と作中人物の比較を行ったことがあるが、彼女たちの場合と比べて、ライヤと汝狄の間には大きなギャップがある。

張愛玲は移民した米国社会での孤独と不安の中でライヤと出会つた。ライヤとの結婚生活は病氣と介護と経済苦があつたものの、強い夫婦愛で結ばれていたと思われる。小説では、汝狄との生活は結婚前にできた子の墮胎の描写が中心の凄惨なものとして描かれている。

伝記と小説との比較を通じて、米国生活が張愛玲の文学と人生にどのような影響を与えたのか、それを踏まえてどのような張愛玲像が描けるかを示したい。

移民した米国社会の孤独と不安の中でライヤと出会い、打算的でない国際結婚をした張愛玲を文学的に考えていく。それにより今までの張愛玲像に比べ、新しいイメージの張愛玲像ができることを示す。

II-8 沈從文の物質文化史研究——銅鏡への興味

福家 道信（近畿大学）

五〇年代後半より沈從文は物質文化史研究の成果として『中国絲綢図案』（一九五七）、『唐宋銅鏡』（一九五八）、『龍鳳芸術』（一九六〇）の三著を発表している。このうち『唐宋銅鏡』は春秋戦国期以降宋代までの銅鏡の歴史を四期に分け説明した「題記」と唐宋銅鏡九三点の図像、及び付録の戦国期以降の銅鏡六七点、その他銅鏡関連の資料図像五点を収録し、「題記」の内容が中国古代の彫刻、冶金技術、刺繍、紋様図案、銘文内容、社会風俗の流行など多岐に渡り、記述が独自の精細さをもつこと、また主に日本の図録資料からだが多数の先行図録より図像の借用をしているなど、沈從文の銅鏡への没入ぶりを示す資料として注目される。沈從文の文学をふり返った場合、銅鏡に関し彼が作品で直接的に語ったことはほぼ皆無と考えられるが『從文自伝』『学歴史的な地方』によれば、彼が北京に出る直前、湖南西部保靖で軍閥指導者陳渠珍のもと副官を務め、陳の収蔵書籍と青銅器をも含む書画骨董類の管理を任されていた際の記述に、陳の蔵書中に『西清古鑑』『薛氏彝器鐘鼎款識』のあったことが見え、当時の沈從文が収蔵品を整理鑑賞し、疑問を生じた際これらの書物を参考にしていたことが窺われる。『唐宋銅鏡』附録には『西清古鑑』の銅鏡部分より複数の図像が借用されている。自殺未遂直前に沈從文が書いた「關於西南漆器及其他」（一九四九）には抗日戦争時、昆明で「女史箴図」中の鏡奩と同様の入子式漆器を発見した際の驚きが語られ、当時銅鏡に関し彼が一定の知識を有していたのが分かる銅鏡と沈從文の縁はこのように人生早期より『中国古代服飾研究』にまで及ぶ。発表者は銅鏡に関し全くの門外漢だが本発表では『唐宋銅鏡』を中心に沈從文の銅鏡への関心の有様を考察し、彼の文学の広がりや深みを探る一助としたい。

II-9 八〇年代の中国における民族・文化的アイデンティティーの諸相——「ルーツ文学」の場合

王 柳（東京大学大学院）

本稿は、八〇年代の中国文芸界において「ルーツ文学」と総称されている創作傾向と、それに関する議論と文学作品を素材にして、中国の民族・文化的アイデンティティーの一面を描写しようとするものである。「ルーツ文学」を問題として取り上げた理由は、中国現代社会の転換期ともいえる八〇年代に現れたこの創作傾向が、中国の民族・文化的アイデンティティーをどのように論じ、いかにして表現できたか、または表現できなかったのかが、中国現代文学の性質とその歴史的文脈の考察にとって欠かせない意義を有しているからである。そのため、具体的には、作家たち自身の言説と作品を重視し、これを今日だからこそ見えてくる時代的背景と照らし合わせながら、地域・歴史・言語・伝統といった民族・文化的アイデンティティーの思想的特色と意義を析出することを目指している。考察にあたっては、一九八五年前後の「ルーツ文学」をめぐる文学論議や、中国の農村社会を描いた代表的な作品『赤い高粱家族』（莫言、一九八七年）などを主な分析対象とする。グローバル化が問われている現代社会において、民族・文化的アイデンティティーが現代にどのような影響力を持っているのかについて考える上で、重要な脈絡のひとつと考えられる。

II-10 韓寒と「知識人文学」：「八〇後」から見る中国同時代の文学像

楊 冠穹（関西外国語大学）

尾崎文昭はかつて、「美女作家」の登場をもって「知識人」による「新文学」が終焉したと論じた。それは、新时期文学を「美女作家」の登場によって二分する観点に結びつくものである。この観点によれば、「知識人文学」の基本的な特徴は「啓蒙」であるのに対して、消費社会に入りつつある中国の読者は「美女作家」に代表される「大衆文学」を求め始め、結果的に「知識人文学」は社会的な意味を持たなくなつたという。

しかし、そこには二つの問題がある。まずは、当局が民衆を「近代化に貢献」させるために、「知識人文学」を利用して「教化」を行うという構造の問題について、実は、(1)「美女作家」も（創作目的とは別に）民衆に対するコントロールに利用されたのではないかと考えられる。二一世紀の中国で必要なのはもはや「憂国憂民」の意識ではなく、「社会主義市場経済」の「優越性」を強く感じさせるという「構造」の変化が生じている。この点に関しては、メディア研究の領域においてすでに指摘されたように、かつて体制の「抑圧」から離れたと思われるネット言論さえもコントロールされているのである。加えて、(2)「八〇後」文学の出現はまた「美女作家」を転覆する可能性がある。例えば、韓寒のような作家は作品における強い「啓蒙」意識において、「知識人文学」に近いと考えられる。

以上で述べた二つの問題から見ると、「知識人文学」が終焉したのではない。社会・政治の状況が変化したため、それに応じて「文学」に求められるものが変わった可能性が高い。実際、韓寒に似たような発想や表現は、一九八〇年代半ば頃に最も活躍した王朝にも見られた。特に、王朝の文学界への反発の姿勢は、韓寒が論争を起こしたことにも見て取れる。そこで、韓寒と「知識人文学」との関連性を解明することによって、「八〇後」創作と既存の文学界、社会との関わりなど、これまでの理論と経験で解釈できなかった課題を究明できる。

Ⅲ-1 鄭玄の『周礼』注釈における漢の制度をめぐる言説——中国の儒教経学における「古」と「今」について

張 瀛子（東京大学大学院）

中国の儒教は、漢代以降、諸々の経書を解釈する学問、すなわち経学を中心に展開されてきた。その中で後漢末期の鄭玄は、後世への影響力のため極めて重要な存在であるのは疑いようのない事実である。鄭玄の経学は『周礼』を中心とするものだとされてきた。ところが、鄭玄の『周礼』注釈には、後世において非常に問題視された一つの特徴がある。理想化された古代の周の制度を、鄭玄はしばしば自分が見聞きしていた漢の制度によって説明するのだが、このような「漢」と「古（周）」の類推は果たして妥当なのだろうか。宋代以降、この問題は儒学者たちの間で本格的に取り上げられ、鄭玄の「アナクロニズム」は最終的に「克服」されることとなる。

本発表は、『周礼』「九賦」の税制解釈の変遷に着目し、鄭玄の『周礼』注釈における漢の制度が問題とされ、ついには排除されていく歴史過程を取り上げる。鄭玄によれば、「九賦」は漢の人頭税すなわち「口率出錢」にあたる。これを批判して提示されたのが「九賦」を「田地之租」とする解釈であり、当説は最後に清末の孫詒讓の『周礼正義』に採用される。孫詒讓は、彼以前の『周礼』諸説を收拾し、鄭玄の「口率出錢」説は漢代固有の制度であり、古の周制と同じではないと論証した。彼の判断は一見、実証的な考察による合理的なものだが、本発表は、孫詒讓が鄭玄説の代わりに立てた周の税制解釈の矛盾を指摘することによって、彼の鄭玄説批判ならびに漢制排除は、彼が古の周制に前提として与えている価値観によっている面も無視してはならないと論証してみたい。そしてこの論点が認められるのなら、鄭玄と孫詒讓ら後世の経学者たちの『周礼』解釈の相違は、「古」と「今」の異なる捉え方も重要な原因だと考えられる。「古」と「今」への認識は、儒教の経書解釈を根本から規定しており、経学とはどういう性格の知的活動であるのかを我々に示してくれるのではないか。

III-2 李鼎祚『周易集解』の流伝について

藤田 衛（広島大学）

本発表は、唐・李鼎祚撰『周易集解』の流伝の仕方と、その各版本の特徴について報告するものである。

『周易集解』は、その名の通り、漢から唐までの易注を集成した書物である。その収録されている易注のほとんどが散逸しているものであり、『周易集解』は漢から唐代までの易解釈を知る上で貴重な書物となっている。しかし、現存する『周易集解』には、一つの問題がある。それは、『周易集解』の版本によって見過ごすことのできないほどの文字の異同があることである。それゆえ『周易集解』を利用するにあたって、版本の系統と特徴の把握が必要不可欠なのである。

『周易集解』の完本で残る最も古い版本は、明嘉靖三十六年（一五五七年）、朱陸樺が刊刻した聚楽堂本である。朱陸樺は、李開先（一五〇二年—一五六八年）から得た宋本を刻して伝えると述べている。しかし現在、肝心の宋本は完本としては伝わっていない。ただ、毛晋汲古閣旧蔵の南宋嘉定大字本が、清朝滅亡後、海外に流出し、プロイセン国立図書館に所蔵され、戦後、ポーランドのヤギェウォ大学のヤギェウォ図書館にその巻八〜巻十までが所蔵されていることは知られていた。近年、ドイツのベルリン国立図書館が五巻から十巻までのまさに汲古閣旧蔵の嘉定大字本の書影をウェブ上で公開した。八巻から十巻まではヤギェウォ図書館所蔵本を利用したのだと推されるが、五巻〜七巻までは新出の部分である。このことによって、宋刻本から明刻本への継承関係がより正確に把握することが可能となった。また版本による文字の異同の原因の一つに、恵棟の校訂がある。盧見曾『雅雨堂叢書』所収の『周易集解』は、恵棟の校訂が反映されている。この恵棟の校訂が、どの程度、それ以降の版本に影響を与えているのが問題となる。新たに公開された嘉定大字本を踏まえたくうえで、『周易集解』の版本の系統と特徴を考察する。

III-3 北宋初期における「注疏の学」——邢昺『論語正義』の編纂をめぐる

王孫 涵之（京都大学大学院）

北宋初期、太宗年間から真宗年間にかけて（九七六—一〇二二年）、新統一国家の成立に伴い、経書の校定や編纂といった文教統一政策が行われた。その結果の一つが邢昺の編纂した『論語』『孝経』『爾雅』三正義である。そのうち、『論語正義』の編纂の際に底本とされた皇侃『論語義疏』は現存しているため、両者の文字を比較することによって、邢昺の編纂方針を窺うことが可能である。

『論語正義』の編纂に関して、『五経正義』と一致する箇所が少なくない点、野間文史氏によって究明されている。その由来が劉炫『論語述議』と『五経正義』のいずれにあるかはまだ検討の余地があるが、いずれにせよ、なぜ皇侃『義疏』ではなく劉炫『述議』や『五経正義』の解説を用いたのか、という、邢昺の思想背景は考えなくてはならない。『論語正義』のみならず、『爾雅正義』もまた同様に『五経正義』を踏襲したところがあるという氏の研究を考慮すれば、邢昺の背後には『五経正義』を中心に据える学問体系を想定することができる。これは、『五経正義』成立以来、科挙制度に密接な関係を持ち、経書講義で国定の注・疏を墨守するという、いわゆる「注疏の学」（宋・呉曾『能改齋漫録』卷二）を体現していると思われる。

本発表は、『論語正義』の編纂をめぐる、唐宋期の経学と科挙の資料とを合わせて、北宋初期における「注疏の学」の構造とその性格を論じたい。その上で、「注疏の学」はそれ以降の宋代経学に対してどのような影響を与えたか、経学の歴史上どのように位置づけられるのか、ということを明らかにしたい。

Ⅲ-4 学者としての梁啓超―日中の新資料から見た晩年の梁啓超像

張 淑君（広島大学大学院）

今日に至るまで、梁啓超に関する研究は多方面において行われており、かつ、大きな成果をあげてきた。ただし、学者としての梁啓超、つまり一九二一年以後の晩年の梁啓超に関する研究は比較的少なく、また、その多くは梁啓超の思想の変化及び東西文明に対する認識の変化や彼の史学観などを中心としたものに留まっている。

一方で、近年、梁啓超に関する資料の整理が進められるにつれて、学術研究に対する晩年の梁啓超の考え方がようやく明らかになってきた。発表者は、国立国会図書館や早稲田大学附属図書館などに所蔵される文献を調査し、これまで知られていなかった梁啓超に関する資料を新たに発見したが、その中には、日本の知識人が学者としての梁啓超に言及したものが少なからず存在した。これらの新出資料は既存資料と合わせて読んでみることで、学術に対する晩年の梁啓超の態度や、日本及び中国で学者として活動した彼に対する評価により深く考察を加えることが可能となる。

発表者はまず、近時に整理された晩年の梁啓超の書簡、とくに息子の梁思成及びその妻林徽因に宛てた手紙と、彼自身の日記に考察を加え、清華大学国学研究院で「四大導師」の一人に数えられた梁啓超が、学術研究や大学教育に対して、如何なる考え方を持っていたのかを明らかにしようと考えた。また、晩年の梁啓超と日中の知識人との交流について整理し、日本でも出版・翻訳が行われた彼の著作、とくに『清代學術概論』と『中国歴史研究法』の二冊を取り上げ、学者としての梁啓超が日中の学術界に如何なる影響を与えたかについて考察を行うこととした。

今回の発表では、既存の資料と発表者が新たに発見した資料を総合的に分析することで、晩年の梁啓超の学術活動について明らかとなった点を述べたい。

Ⅲ-5 葛洪の人間観について―尚賢思想を中心に―

臧 魯寧（京都大学大学院）

『抱朴子』外篇は、葛洪（二八三～三四三？）が自分の政治思想や社会思想を幅広く述べたものであるが、独特な創見は少ないものと指摘されてきた。しかし、その内容を通覧すれば、葛洪が自分の人間観、特に人材登用の重要性ならびに鑑識・登用の方法に力を入れて論じたということが分かる。さらに、一見関係の無い篇においても、葛洪の人間観が窺われる。また、葛洪の人間観が単に外篇だけに見えるものではなく、内篇においても散見し、さらにそれは葛洪の修行法にも密接に関連しており、葛洪の思想のメインテーマの一つともいえよう。発表者は、葛洪の人間観の一側面として、『抱朴子』外篇における尚賢思想に注目する。

本発表は、先行研究を踏まえ、葛洪の尚賢思想の内容を把握した上で、下記の二つの側面から考察を行う。尚賢思想は歴史が古く、儒家思想に関係する文献のほか、『墨子』や『太平経』にも見えており、本発表はまず、それらの文献を検討し、葛洪の尚賢思想との異同を比較することによって、諸思想の關係及び特質を論じる。また、後漢と魏晋時代の人材登用制度の弊害が露呈しつつあるという社会背景のもとで、葛洪の尚賢思想の意義を考える。以上の考察をもとに、思想的系譜と社会的意義との観点から、『抱朴子』外篇にみえる尚賢思想の六朝思想史上における位置付けを明らかにする。

Ⅲ-6 碧霞元君関連宝巻から見る明末清初の北京の民間信仰

二ノ宮 聡（関西大学非常勤講師）

碧霞元君は泰山の主神・東岳大帝の娘とされる女神であり、人々の心願成就、病氣平癒、子孫繁栄を司るとされる。その信仰は宋代に始まったとされ、明代以降、山東や北京を中心とする華北一帯で盛んに信仰された。神格の起源は、北宋の真宗皇帝が泰山に巡幸した折、山頂付近で発見した玉女像を祀り、碧霞元君の封号を与えたことに由来するとされる。だが、史実に碧霞元君の由来に関する記述は残されておらず、いまだに不明な点が多く残される。

このように神格の起源に関しては未解明の問題が多々残されるが、民間の信仰活動に目を向けると、明代後期の泰山ではすでに東岳大帝をしのぐほどの香火を集め、民衆の支持を得ていた。

一方、北京では明代に信仰が伝わると貴族の婦女を中心に信仰され、次第に民間へと広まった。特に清代中期以降になると、東郊の丫髻山、西郊の妙峰山、さらに五箇所の廟（五頂）が有名な碧霞元君廟として知られ、民国時期まで大規模な廟会が開催された。近年、各地で廟会が復興されるに伴い、北京の碧霞元君信仰に関する研究も活況をみせる。これらの研究は、一九二五年に顧頡剛が実施した妙峰山廟会調査を基に、比較的資料の豊富な清代後期から民国時期の状況について、さらに現在の廟会に関するものが多い。よって本発表では、従来の研究ではあまり言及されていない明末清初の北京での碧霞元君信仰について、民間に流布していた碧霞元君に関する宝巻に着目し検討する。例えば『靈心泰山娘娘宝巻』は、明万暦年間に黃天教の經典として北京で作成された。そのため九娘娘など北京特有の信仰が色濃く反映される。同じく万暦年間に編纂された『統道藏』に収録される『碧霞元君護国庇民普濟保生妙経』では、人々を罪業から救うといった東岳大帝の職掌に近い面が強調される。よって、これら經典を手がかりに、東岳大帝から碧霞元君へという泰山信仰の変遷過程、さらに民衆の信仰活動について検討したい。

III-7 鬼と疫病の関係再考

董 伊莎（関西大学大学院）

中国史上において「厲鬼」は後嗣がなかったり、凶死などの原因によって災いをもたらしたりする人鬼とされている。その性格に關しては一般に疫病との関係が強調されているようである。しかし、疫病をもたらす人鬼由来の鬼神は厲鬼的要素を持つものの、信仰の展開においてその神格が厲鬼的マイナスイメージから脱し、正当化された神として信仰されていくケースが多い。その意味で厲鬼イコール疫病鬼神ととらえるのは正しくない。一方、冤罪によって死んだ人鬼が天に訴えることで疫病を引き起こすケースもある。天罰思想にもとづいて冤死者と災異が結びつくのであるが、ここで疫病を引き起こす力を持つのは冤死者ではなく天であり、人鬼は疫病鬼神としては微力である。

ところで、厲鬼に対する祭祀は早くも『礼記』祭法篇に記された七祀・五祀・三祀の中に見える。そこでは後嗣のない人鬼を厲といい、王、諸侯、大夫それぞれの階級ごとに「秦厲」「公厲」「族厲」に分類される。そして、後嗣のない人鬼を同じ階級に属する者がその肉親に代わって祭祀するという。しかし、『礼記』において厲の神格は善悪であるのか否か、災いとどのような関係をもつのかについては言及がない。史料によれば、この種の「厲祭」はその後、後漢末頃から唐にかけて中断していたが、唐の開元年間に再び復活し、以後絶えることなく実施された。そして明代になると、厲の祭祀は七祀や五祀から独立し、「秦厲」「国厲」「郡邑厲」「郷厲」の四つに分けられた。ここには厲鬼が地域範囲（国・郡邑・郷）で捉えられるという新たな厲祭の形態が示されている。その祭文を見ると、厲鬼は鬼神世界の組織のもとで管理され、弱い存在として位置づけられていたこともわかる。

このように、疫病鬼神の神格や天罰思想の構造から見れば、厲鬼と疫病の関係は自明とはいえない。また、通常の厲鬼は血縁や地縁によって組織化され、疫病との関係は特に注目されず、力を持つ鬼神とされることもなかった。本発表では、中国における厲鬼の存在をめぐって整理をほどこすとともに、一般人鬼や厲祭のあり方を考慮しつつ、厲鬼の神格と疫病との関係を再検討してみたい。

Ⅲ 18 病と巫——「與鬼交」を中心に

孫 瑾（広島大学大学院）

発表者は「與鬼交」（鬼、神、鬼神、鬼物、邪物などのものと交わる）を研究対象としている。これは中国伝統医学において、魏晉南北朝以降に現れ、主に女性に起こるヒステリー性の病気である。その症状は情緒の異常、恍惚、鬼神の姿が見え、鬼神の声が聞こえ、或いは鬼神に憑依されることなどを含むがこれらに限定されない。

発表者はこれまで魏晉から隋唐までの医学文献を中心に考察してきた。当時「與鬼交」に対して合理的な解釈に様々な努力が行われたが、結局その病気を完全に解決することができず、医学文献でも呪術治療などが併記されている。一方、江蘇省中部沿海地域で「與鬼交」と同質の病気及び呪術治療の現存例が見つかり、発表者はそれについてフィールドワークを行った。この種の病気の呪術治療は当地で主に二つのパターンが存している。一つは患者の体に憑依して崇りを為すもの（多くの場合は死霊）を払い出すことである。もう一つは患者に憑依するもの（多くの場合は神）と共存させることである。医学文献に記されている呪術治療はみな前者と同じ立場であり、後者に関する記録は殆ど見えない。また、後者のパターンの治療を受けた患者が、鬼神と交流する能力を得るようになったという例も見られ、後者のパターンは医学文献以外の世界、即ち巫文化との関連で考えていく必要があると思われる（実は「與鬼交」という語は、他の文献に巫の能力を示す例としても用いられている）。

本発表では文献的考察に基づき、人類学の先行研究をも利用し、病気とされる「與鬼交」と巫との関連性を明らかにしていきたい。

特別講演会 中国研究とデジタルヒューマニティ [共催 KU-ORCAS (関西大学アジア・オープン・リサーチセンター)]

近年、中国関係文献資料のデジタル・アーカイブが世界的規模で進行している。多くのデータベースが公開され、中国研究に極めて有益な環境が生まれつつある。ただ、日本の場合、諸外国に比べて若干遅れ気味な状況にあることは否めない。日本における中国研究の最大の学会組織である日本中国学会が先頭に立って積極的にデジタル化、アーカイブス化に乗り出す時期に来ていると思われる。そうした状況を踏まえ、今回の年次大会では「中国研究とデジタルヒューマニティ」と銘打って、以下のような特別プログラムを設けることとした。

趣旨説明 内田 慶市 (関西大学)

東アジア文献資料のデジタルアーカイブスの現状とKU-ORCASの目指すもの

講演

一、鄭 傑文 (山東大学国際漢学研究センター)

「全球漢籍合璧工程」

二、師 茂樹 (花園大学)

「東アジア仏教研究におけるコンピュータ利用の実際」

三、安岡 孝一 (京都大学人文科学研究所)

「AIを用いた漢文の文法解析」

講師紹介

鄭傑文

山東大学講席教授、文学博士。中華文学史料学会副会長、古代文学文献研究会会長を兼ねる。先秦諸子および上古文献研究に従事し、中国教育部の中国高校人文社科研究著作一等賞などを受賞。著作に『中国墨学通史』（人民出版社）、『戦国策文新論』（山東人民出版社）、『穆天子伝通解』（山東文芸出版社）など。

また「中華古籍保護計画」の中の国家重点文化工程「全球漢籍合璧工程」の責任者として、国内外の三百余名の研究者の協力のもと、「全球漢籍目録」、「全球漢籍珍本」などのデータベース構築に十年計画で取り組んでいる。

師 茂樹

早稲田大学第一文学部卒、東洋大学大学院修了。博士（文化交渉学、関西大学）。現在、花園大学教授。専門は仏教学（東アジア唯識思想、仏教論理学）、人文情報学（東洋学へのコンピュータ利用）。

単著として『論理と歴史…東アジア仏教論理学の形成と展開』（ナカニシヤ出版、二〇一五年）、『大乘五蘊論』を読む』（春秋社、二〇一五年）、共著として漢字文献情報処理研究会編『電腦中国学入門』（好文出版、二〇一二年）、同編『人文学と著作権問題…研究・教育のためのコンプライアンス』（好文出版、二〇一四年）など。

安岡 孝一

京都大学大学院工学研究科情報工学専攻を修了、京都大学大型計算機センター助手、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター助教などを経て、現在、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター教授。京都大学博士（工学）。

漢字コード設計論を端緒に漢字文献の情報処理研究を進め、現在、古典中国語（漢文）の自動文法解析の研究に従事。著書に『文字符号の歴史——欧米と日本編』（共立出版）、『日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード』（京都大学）、『古典中国語 Universal Dependencies を読む『孟子』』（京都大学）など。

近世『家礼』研究——文献と儀礼実践の間のコミュニケーション

○橋本 秀美（青山学院大学）

葉 純芳（北京大学）

新田 元規（徳島大学）

松川 雅信（日本学術振興会特別研究員）

韓 淑婷（九州大学大学院）

近三十年、『家礼』研究は漸く盛んである。アメリカにおいては、八〇年代から近世家族制の研究成果を発表していたパトリシア・イーブリー（Patricia Buckley Ebrey）氏が一九九一年に『家礼』の英訳と共に、『家礼』系著作と社会文化との関係を論じた重要著作を公表し、その後も二〇〇八年のニコラス・スタンダート（Nicolas Standaert）氏の明末清初の葬礼に関する著作など、成果は少なくない。アメリカの研究は、コミュニケーションに重点を置いて、社会の維持あるいは変化が如何に起こっていたかを議論している。西洋から見ると、中国はまず巨大な一文明として存在している。一六世紀の宣教師たちは、この巨大な国が如何にして一つの社会として機能しているのか、という点に強烈な関心を持っていた。中国各地から日本・ベトナムまで、人人の口頭言葉は通じないが、文書を通じて意思の疎通が出来ることも既に指摘されている。アメリカの中国研究において、地方末端の行政の現場から国家中枢まで、地理的にも行政的にも異常に大きな距離を持つ中国において、情報伝達が如何に行われていたのか、が一つの大きな焦点となっていることは、創始者フェアバンクからクーン（Philip Alden Kuhn）の『叫魂』まで一貫している。

「中国」の存在を無意識の前提としている日本を含む東アジアの研究者は、『四書五経』や『資治通鑑』に代表される中国古典文献を学ぶことで、「中国」に関する諸概念を内面化していく。その結果、「中国」的社会的在り方そのものを問うことなく、文献の内容と概念化された社会制度を直接に対比して、静態的影響関係を指摘することに満足しがちである。中国と朝鮮・日本との共通性と差異の問題も軽視されがちである。この点、我我はアメリカの研究に学ぶべきであり、現在少なからぬ若手研究者がそのような関心から研究を進めている。

日本においては、今回学会の主催校代表をされておられる吾妻教授が目覚ましい成果を挙げてこられていることは周知の所である。『家礼』は中国のみならず、朝鮮・日本・ベトナムへも大きな影響を与えているから、関係の研究は少なくない。但し、かつては『家礼』は日本において大きな影響を持たなかったとする見方が主流であり、近年ようやく資料の発掘と研究が進んできてきている所である。中国においては、研究者の層が厚く、研究論文は数知れないが、とりわけ明清期の儀礼実践に関する論考は参考価値が高いと思われる。

今回のシンポジウムは、日本近世における『家礼』受容の研究で重要な新成果を挙げ続けている松川・韓両氏と、明末清初の礼をめぐって文献と思想と社会形成の間の関係を研究している新田氏、更に後世の『家礼』の祖本となった楊復注に注目する葉氏にそれぞれ研究成果を発表して頂く。同じく『家礼』を主軸とする研究でありながら、研究対象の特質がそれぞれ異なり、分析の視点も異なっているから、相互観察によって新たな問題や視角を探る討論ができることを期待している。

特別展「関西大学図書館所蔵の貴重漢籍」

会場 関西大学総合図書館一階 展示室

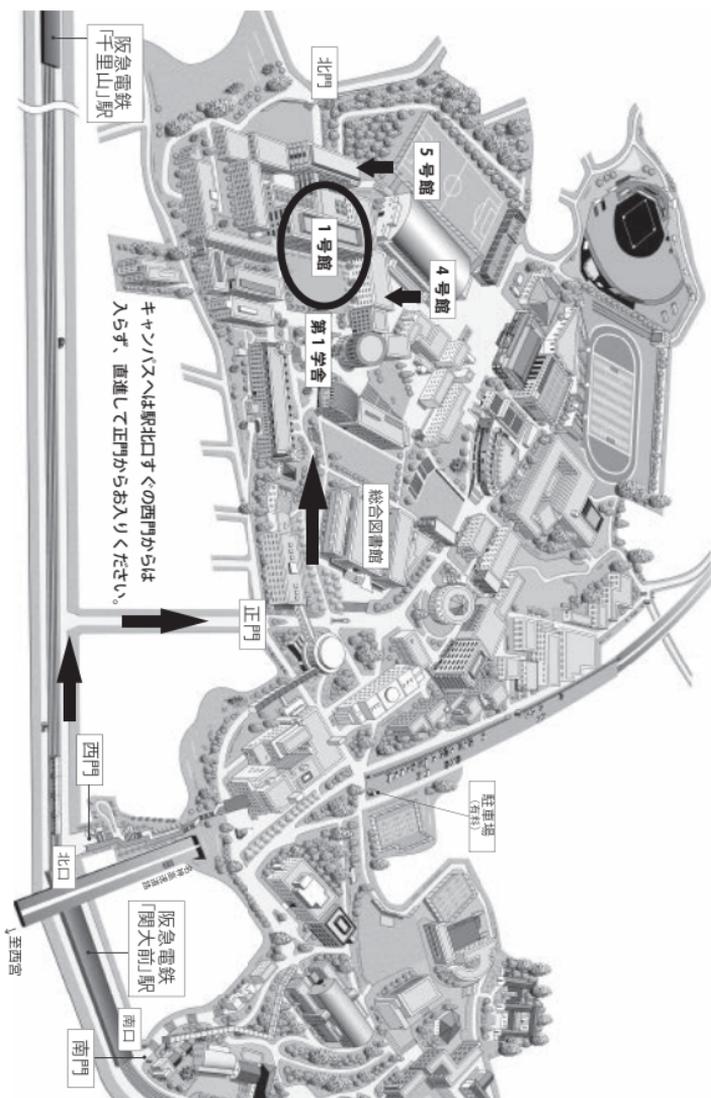
期間 九月二十六日（木）九時半～十月十五日（火）十七時

この度、日本中国学会第七十一回大会の開催に因んで、九月二十六日（木）より十月十五日（火）まで「関西大学図書館所蔵の貴重漢籍」と題する展示会を関西大学千里山キャンパス総合図書館一階展示室で開催いたします。

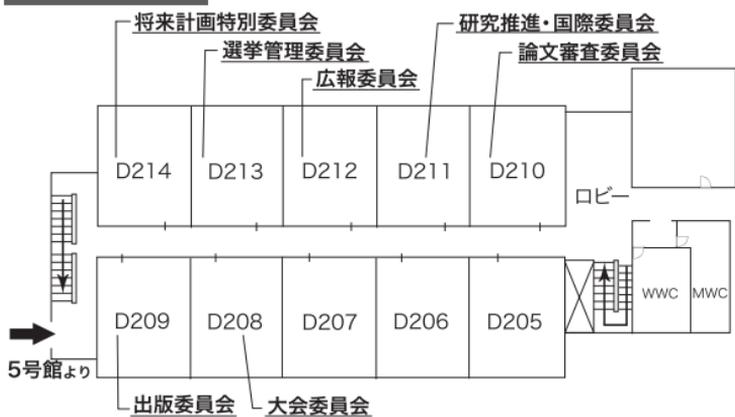
ご承知のように、石濱純太郎・増田渉・大庭脩など歴代の関大教授や図書館長の努力により、関西大学図書館には中国研究関係の貴重文庫やコレクションを多く所蔵しており、これまで国内外の研究者に活用され、高く評価されています。その代表的なものとして、唐玄宗の「石台孝経」の拓本をはじめ、孝経刊本計四百八十三部を収蔵するわが国屈指の『孝経』コレクション「玄武洞文庫」、南宋の「経律異相卷第二」（梁武帝の勅を奉じて僧旻等が撰集したものを釈宝唱などが勅命によって増補改編）を収める「吉田（伊三郎）文庫」、清朝の四庫全書の原本（文溯閣所蔵の三点）や章学誠『章氏遺書』を架蔵する「内藤（湖南）文庫」、四庫全書の原本（文瀾閣所蔵の一点）や貴重和刻本を有する書誌学の第一人者長澤規矩也の「長澤文庫」、一九三一年に魯迅の上海自宅で魯迅による個人授業を受けていた東大出身の増田渉所有の魯迅手沢本や西学東漸関連書籍を多数収める「増田文庫」があります。さらに南宋版『尚書註疏』を含む豊富な和漢古書を収める近世日本文学の第一人者中村幸彦の「中村文庫」、関西大学のルーツの一つであり近世近代大阪漢学の重鎮・泊園書院の「泊園文庫」も本学の誇るコレクションです。

今回の展示は、以上に挙げた代表的典籍の一部とともに、内藤文庫などに所蔵の代表的書画（たとえば、五四運動期の教育総長を務めた民国前期の大蔵書家傅增湘が内藤の還暦を祝うために描いた清代の考証学者錢大昕の肖像など）を合わせて展示する予定です。ご期待ください。

大会会場案内図



4号館 2F



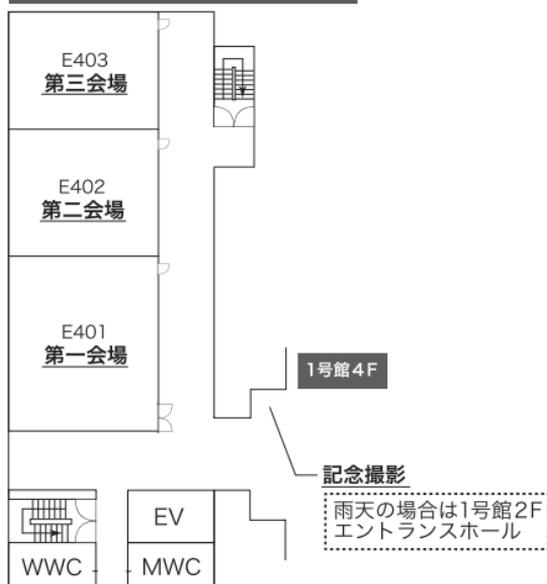
5号館 2F



5号館 3F



5号館 4F



大会準備会にメールで、①ご希望の日時、②お子様の人数と年齢、③申込者氏名、④携帯電話番号、⑤アレルギー物質に関する情報（該当者のみ）、⑥オムツ替えの要否、あるいはトイレ・トレーニングの状況、⑦一時託児など保育経験の有無、の各項目についてお知らせください。折り返し、メールにて書類をお送り致します。

申し込み期限は、9月27日（金）です。期限を過ぎてのお申し込みや、事前申し込みなしでのご利用はできませんので、ご承知おきください。

• 予約の変更

キャンセルや時間の変更などは、早めにご連絡ください。当日の急な発病などによる変更でも、できる限り対応いたします。

3. 当日の諸注意

• 受付

大会受付に、託児窓口を設けます。料金をお支払いいただいた後、担当者が託児室までご案内いたします。原則として、申込者ご自身にお預け・お迎えをお願いいたします。

• お持ちもの

1. 保護者の身分証明書（運転免許証、健康保険証、母子手帳等）、受付の名札
2. あらかじめお送りする「託児利用申込書」（前もってご記入ください）・「保護者の皆様へ」（資料）
3. 託児に必要なもの（お食事・お飲み物・おやつ・ミルク・哺乳瓶・おむつ・着替え等）

• お迎え

原則としてお預けと同じ方をお願いいたします。再度受付にお越しください。身分証明書をご呈示いただきます。託児室へは、担当者が同伴いたします。

• ご注意

熱がある場合、体調不良の場合は、お預かりできないことがあります。ご了承ください。

その他、あらかじめお送りする「保護者の皆様へ」をご覧ください。

4. お問い合わせ先

大会準備会：japansinology71@hotmail.com

ご不明の点はご遠慮なくお問い合わせください。

託児室のご案内

今大会では託児室を設置致します。希望される会員は以下の要領でお申し込みください。

1. 概要

• ご利用資格

本大会に参加される会員で、0歳児から概ね小学生までのお子様をお持ちの方。

ご注意 0歳児のお子様の保険については、後掲「保険」の項目を必ずご確認ください。

• 委託先

関西大学での学会託児に多数の実績のある市民団体に委託します。ご利用申込後に詳細をお知らせいたします。

• 開設時間

10月12日（土）9：00～18：00

10月13日（日）9：00～16：00

• 開設場所

関西大学千里山キャンパス内に開設します。当日受付時にご案内いたします。

• 利用料金

利用料金は、利用申込の後にお知らせいたします。目安として、昨年度大会の実績を越えない範囲で設定する予定です。

***昨年度の実績：**

半日（午前のみ、もしくは午後のみ）：1,500円／日：3,000円
利用料金は、当日受付にてお支払いください。

• 保険

万が一の事故に備え、委託先団体が保険に加入しています。補償については、保険会社の規定の範囲内となります。0歳児の方には委託先団体が加入する保険が適用されません。0歳児のお子様が万が一事故に遭われた場合は、各ご家庭で加入されている保険でご対応いただくこととなります。

なお、日本中国学会並びに関西大学は、事故等に対する責任を負いかねます。

2. お申し込み

• 予約方法

振込用紙での申し込みは受け付けておりません。



〈大会会場〉

関西大学千里山キャンパス

【アクセス】

・梅田（大阪）からのアクセス

阪急電鉄「梅田」駅から、「北千里」行で「関大前」駅下車（この間約20分）。または京都「河原町」行（通勤特急を除く）で「淡路」駅下車、「北千里」行に乗り換えて「関大前」駅下車。北口から徒歩約5分。

・地下鉄利用のアクセス

大阪メトロ堺筋線が阪急電鉄「淡路」駅を経て「北千里」行で「関大前」駅に直通しています。

・新幹線「新大阪」駅からのアクセス

「新大阪」駅から大阪メトロ御堂筋線「梅田」方面行で「西中島南方」駅下車、阪急電鉄「南方」駅から「淡路」駅を経て「関大前」駅下車（この間約30分）。

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

関西大学 以文館3階 KU-ORCAS内

日本中国学会第71回大会準備会

TEL: 06-6368-1834 FAX: 06-6368-0235

※当日連絡先: 050-5891-2043

E-mail japansinology71@hotmail.com